



1 学年 自然教室 5月9日(水)～10日(木)

自然教室を終えて

1 学年主任 星 浩二



▲小田原城

「誰が雨男、雨女なのだろうか…」

えてしてこういう行事のときには雨を降らす職員が誰かいるもの、ということで自然教室は雨の中でのスタートでした。もうすでに学校出発の時点で箱根旧街道ハイキングはあきらめていました(もっともヘトヘトになるまで歩かなくてすむと喜んでいた生徒と職員が多数?)。そこで、予定を変更して雨天バージョンである小田原城見学へと向かいました。

ところが小田原城に着いた頃には雨も弱まり、ほとんどの生徒は傘を持たずに小田原城見学を行うことができました。さてここで一つ悩みが

…、「この後の予定はどうしよう、このまま雨天バージョンである箱根彫刻の森美術館に向かうか、それともここから晴天バージョンに戻すか…」と思案していたところ、副校長先生が鶴の一声、「クイズラリーできるんじゃない?」、この一言でバスは恩賜箱根公園に向かうことになりました。恩賜箱根公園に到着し、バスの中で昼食を済ませてから全員で箱根関所を見学、集合時間 10 分前には集合場所に集まっていました。そういえば小田原城といい箱根関所といい(2日目の地球博物館も含めて)、見学時間をもて余していた生徒が多数、「中学1年生には興味深くじっくりと見学するのはまだまだ無理か…」と思っていたのは私だけだったのでしょか…?

恩賜箱根公園に戻り、中央広場から班ごとにクイズラリーの出発、公園内を縦横無尽に走り回って問題を解いていく生徒たち、中には二百階段(もっとも 190 段しかありませんでしたが)を何往復も昇り降りした生徒もいたようです。宿舎に行ってから体育館レク(ボール送りリレーとドッジボール)でとどめをさされた結果、夜はよく寝ていたこと…、夜の生徒たちはみんなよい子でした。

真鶴漁港でのアジの干物づくり、慣れない手つきで包丁を操る生徒たちの顔はいつになく真剣そのものでした。中には器用にさばいて見た目は売り物とあまり変わらないような干物をつくり上げた生徒もいました。

大きな病人やケガ人もなく1泊2日の自然教室を終えることができました。この自然教室を通して、集団行動の大切さ、係活動による責任感、たくさんのものを身につけて大きく成長して帰ってきたと信じることにしましょう。



▲クイズラリーをした恩賜公園



▲アジの干物づくり

自然教室で学んだこと

自然教室実行委員長
1年2組 小川 紗輝

自然教室。この2日は様々なことを学び、体験し、また仲間との友情の深まった2日間になったと私は感じます。

1日目は班行動の場面で注意されることがありましたが、翌日は班でまとまることをより意識して行動できていたと思います。

2日間を通し、小田原城、恩賜公園、関所や漁港での体験等のたくさんのことを学びました。学んだことは、新聞づくりや今後の社会科の学習にいかしていけたらよいと思います。

また、今回でより仲が深まったメンバーを大切に、これからの学校生活を送っていこうと思います。この自然教室のスローガンである、“箱根の風を感じよう、笑顔の花咲く自然教室2018”となっていました、とても素敵な2日間でした。



▲恩賜公園からの芦ノ湖



▲真鶴漁港の遊覧船



ハマ弁にベ이스ターズカレー 5月23日(水)

横浜型配達弁当「ハマ弁」が、今月は横浜DeNAベイスターズとのコラボ企画を実現しました。気になるメニューはベイスターズの若手選手が生活する“青星(せいせい)寮”のカレーです。青星寮では、このカレーを24時間いつでも食べることが可能なのだそうで、筒香選手もこのカレーを食べてスターへ飛躍していったと言われています。これまで横浜スタジアムなどでは販売されていましたが、今回は市内中学校の昼食で食べられる貴重な機会となりました。生徒はもちろんのこと、職員も注文しており、その注目度の高さが窺えました。注文した野口教諭からは「具材が大きくて食べ応えがありました。特に玉ねぎがとてもおいしく、全体的にとっても満足でした。」との感想をもらいました。このようなコラボ企画が実現する「ハマ弁」をぜひこの機会にお試しください。

詳しくはハマ弁ホームページ(www.hamaben.yokohama)をどうぞ。



▲23日のハマ弁



開港記念日・開校記念日 6月2日(土)・3日(日)

6月2日は横浜開港記念日です。1859年の6月2日、幕府が前年にアメリカなど5か国と結んだ修好通商条約に基づいて、横浜は国際貿易港として開港されました。開港以前の横浜周辺の最大の人口密集地は、東海道の宿場町で、人口5,000人ほどの神奈川宿でした。この神奈川宿の南東約4キロに、『横浜市歌』の中で、「むかし思えば とま屋の煙ちらりほらりと 立てりしところ」とうたわれる、戸数100ほどの半農半漁の寒村、横浜村がありました。

開港以後、横浜に来る外国人は日本の魅力と熱気にひかれた文化人や貿易商・技術者が多かったのが特色です。彼らは、日本人が世界最先端の技術や思想を展開したいと思うなら、それに進んで協力したいと考える、ボランティア精神のあふれる人々でした。彼らの多くが、交渉条約を導いた幕府と好奇心あふれる庶民の熱意を感じ取り、横浜にヒト・モノ・カネ、そして情報をもたらしたと言われていました。今日の横浜があるのは、開港当時の外国人がもたらした恩恵があってこそと言っても過言ではないでしょう。

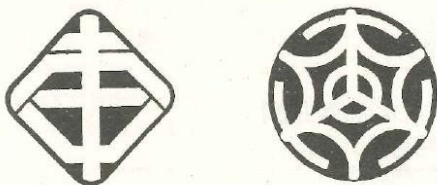


▲開港当時の横浜の様子

その翌日の6月3日は、本宿中学校の開校記念日です。本宿中学校は昭和55年の4月1日に誕生し、6月3日を開校記念日としました。工事の着工が1979年(昭和54年)で、本宿中学校の住所が“川島町1979番地”であることは、偶然にしてもできすぎでしょうか。

創立5周年の記念誌によると、開校時の生徒数は1年生260名、2年生220名、3年生232名の計712名でした。職員は33名が着任し、初代校長は梶野英夫(とがのひでお)先生でした。この校長先生こそが、本宿中学校の校歌の作詞をされた方です。開校時はまだ標準服(制服)が決まっておらず、アンケートをとった結果、男女ともブレザーになったそうです。その中で本宿中の独自性を表すため、上下の色違いにしたという話も残っています。

ここで、突然ですがクイズを出題します。次のふたつのマークは何でしょうか。



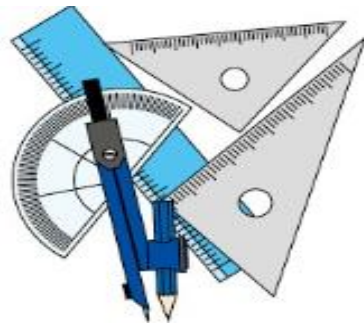
実はこのふたつのマークは、本宿中の校章の最終選考まで残ったうち、「決定されなかったもの」です。美術の授業でデザイン学習として取り入れ、特定の一人の作品ではなく、全員のデザインを総合してつくられたのが、現在の校章なのだそうです。そういった話を知ると校章のありがたさがさらに実感できます。



▲現在の校章

学問に王道なし

冒頭の言葉は、エジプト王のプトレマイオスが数学者ユークリッドに幾何学を学んでいたとき、もっと簡単に学ぶ方法はないかと尋ねたところ、ユークリッドが「幾何学に王道なし」と答えたという話が元になったものです。ここでいう【王道】とは、【近道】【安易な方法】という意味であり、“学問を修める上で、容易な方法はない”ということわざとして使われています。



本宿中では5月15日（火）に1学期中間テストが行われました。毎日の予習・復習。そして、テスト勉強。そういう積み重ねをしっかりとっていくことこそが本当に勉強ができるようになる秘訣です。慌てて一夜漬けで覚えようとしても効果的でないのは言うまでもありません。学習計画表をうまく使いながら、地道な努力を重ねることが、実は学習への一番の近道なのではないでしょうか。

《1学期期末テストの予定》

- 6月19日（火） 英語 / 理科 / 技・家
- 20日（水） 国語 / 社会 / 美術
- 21日（木） 数学 / 音楽 / 保体

4月に配付しました年間予定表では2日間の実施としていましたが、教科数の都合上3日間の実施とします。何卒ご理解いただきますよう、お願いいたします。

【6月のおもな予定】

- 6 / 2（土） 開港記念日
- 3（日） 開校記念日
- 4（月） 5（火） 英語教材販売（辞書・準拠CD）
- 6（水） 7（木） 水着販売
- 6（水） 本中懇話会
- 7（木） 歯科検診（1～3年）
- 8（金） 心電図検診（1年）
- 12（火） 体操着等販売（昼休み）
学校保健委員会
【健康なカラダをつくる食生活】
- 19（火）～21（木） 1学期期末テスト
- 25（月） 学家地連総会・地区懇談会
- 27（水） ハマ弁試食会（PTA 保健成人委員会）

6日に行われる本中懇話会は、例年の土曜日開催から平日へと今年度より移行いたします。25日に行われる学家地連総会と合わせまして、地域の方に学校にお越しいただく機会が多くあります。地域のご意見を伺いながら、よりよい学校づくりを目指してまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。